

# 洗心

題字は入澤素師(龍谷大学長 善行寺住職 (尾道市))

8月3日が近づいてきた。44歳の若さで雷に打たれ、一瞬にして命を奪われた母の命日だ。60年近くたった今でも忘れられることはない。当時は自然災害は今ほど多くなかった。まさか元氣だった母が雨上がりの田んぼの見回り中に雷で命を失うなんて。24歳だった私は嫁ぎ先に

## 窓明

### 鎮魂の日

いた。父は45歳、妹は19歳、弟は14歳の中学生だった。残された4人が受けた衝撃と喪失感と言葉では表せない。しばらくして地元の詩吟サークルに誘っていただいた。詩に集中する時間のおかげで悲しい気持ちを少し振り払うことができ、救われた思いがした。父は45歳、妹は19歳、弟は14歳の中学生だった。今は父も弟も亡くなり、無で連絡を取るけれど、互いに母の話はしない。2人とも涙が止まらなくなるから。私も近いうちに母の待つ彼岸の地に行く。話したいことは山ほどあるが年をとった私に母に分かるかどうか。間もなく母の鎮魂の日を迎える。(広島県世羅町・橋本美幸・主婦・82歳)

# 従業員120人追悼 75年の重み

## 広島県府中町 被爆企業が建立 浄土真宗本願寺派久蔵寺

原爆で120人も従業員たちを亡くした企業が、犠牲者を追悼するために建てた寺がある。広島県府中町の浄土真宗本願寺派久蔵寺。ここで建立75年となった。年月がたつにつれ、寺の成り立ちを知る人は少なくなつた。今は県外出身の僧侶が寺を守り、大切な歴史をつなぎ留めている。

その企業は戦前から鋳物製造を手掛けていた「藤川製鋼所」とい。被爆当時は現在の広島市南区大州や広島県府中町に工場があり、軍需工場として軍艦のスクリーンなどを製造していた。境内の一角に立つ石塔には原爆で犠牲になつた従業員120人の名前が刻まれる。学徒動員された松本工業学校現瀬戸内高の生徒39人も含まれる。大半が国民義勇隊として現在の中区加古町に出向き、建物疎開の作業をしていた。藤川製鋼所の社員たちは建物疎



藤川製鋼所の従業員たちを悼む石碑に向かい手を合わせる佐竹さん。奥が日本堂



## 京都出身の住職 歴史守る

開に動員された同僚や生徒の身を案じ、被爆直後から現地に入った。多くの亡きがらを収容し、社の敷地に運んで火葬したという。「変わり果てた姿になって会社に帰ってきた。社長自らが悲しみや自責の念と向き合うためにも、寺が必要だったのではないか」さらに広島市内は原爆で多くの寺が壊滅し、申いの場が奪われた。「うちの寺も本堂の損傷が激しく、葬儀などを営める状況ではなかった」と、東区の安楽寺前住職の登世岡浩治さん(91)は振り返る。「多くの寺は同じような状況だった。葬儀を諦めた遺族も多くいただろう」と話す。熱心な安芸門徒だった藤川さんは、寺の建立を使命と捉えたのかもしれない。

同社は戦後、社名を藤川産業に変えて寺の敷地内の社屋で機械の部品製造を続けていたが、2007年ごろに廃業した。寺を運営する宗教法人が09年、そこに新しい本堂を建てた。だが原爆の記憶を刻む旧本堂は残され、今も同じ場所にたたずむ。寺の後継者不足が問題になる中、15年からは京都市出身の佐竹英信さん(45)が着任し、寺を守る。「被爆の悲しい歴史が寺の原点。仏法を説くだけではなく、平和の尊さを伝えることが自分の責務」と誓う。住職になるまでは、原爆に触れる機会などなかった。着任して、この寺の成り立ちを学ぶうち「歴史の重みを感じることができた」と語る。被爆当時の様子について話を聞ける人が減り、風化させないことの難しさを実感する日々という。「原爆で亡くなったすべての人に思いを込め、継承者としての役割を果たしたい」と力を込める。



折り鶴をモチーフにした久蔵寺の合同墓

だいじょうぶ、だいじょうぶ

<45>

文 絵 前田純代

お墓参りでの家族の会話「なんで私だけみんなと同じお墓に入れないの?」女の子が言う。お墓に誰が入っているのか、将来誰が入ることになるのか。答えを親御さんから聞いてそう尋ねた。先祖代々のお墓に父も母も入る。弟も入る。でも自分は入れないのだと言われたようだ。未婚の場合は実家のお墓に入ることもあるが、一般的には結婚したら女の子は相手方のお墓

## お墓参り 「等しくお浄土へ」知る



に入るものだと考えられていた。しかし、家族みんなが同じお墓に入れると思っていた女の子にしてみれば納得がでなかつたのだらう。夫婦別姓が議論されるなど、日本の家族形態が揺れ動く中で埋葬方法も多様化しつつある。これからは、夫婦がそれぞれ好きなお墓に入る「夫婦

別墓」なんてことになるのだらうか。実際に、最近では好きな人と一緒にお墓に入りたいという人が増えている。たいていは夫婦や嫁いしゅうごとの関係がこじれている場合だが、特に仲が悪くなくても「生前ずっと一緒だったのだから、亡くなったときぐらい離れてほしい」ということもあるようだ。

どつや、同じお墓に納骨したら、墓石の下でムギユツとすし詰め状態で暮らさなければならぬと思っておられるような

のだ。たしかに私たちは、生前の生活や好き嫌いをお墓に持ち込んでしまいがちだが、実際にお墓の中で生活をするわけではない。「おらあ、石の下にはおらぬぞ」と言い放つたと伝わるのは江戸時代の著名な妙好人、讃岐の庄松さんだ。妙好人とは浄土真宗の熱心な門信徒で、お念仏の教えをよくこんだ人のことをいう。

家族のいない庄松さんのためにお墓を建てようと思案した友人への言葉で、庄松さんは、いのちの行く末はお墓ではなくお浄土だと伝えたかったのだらう。「俱会一処」と刻まれたお墓がある。阿弥陀経に出てくる言

お浄土には佐藤家、鈴木家といった家のくくりはない。男も女もない。好きな人とも一緒。嫌いな人とも一緒。愛と憎しみを超えて、すべてのいのちを慈しむようになる世界だ。お骨がどのお墓に納められようと、どんなふう埋葬されようと、必ず仏となりお浄土で再会を果たすことができる。お墓とは、そのことをあらためて知らせてくれる場所なのである。(善法寺坊守 広島市西区)

(善法寺坊守 広島市西区)